断章
旭川のアイヌ語地名研究
134
高橋 基

―伊野川から忠別川まで―の地名㉓
ノチウとオサラッペ川(下)

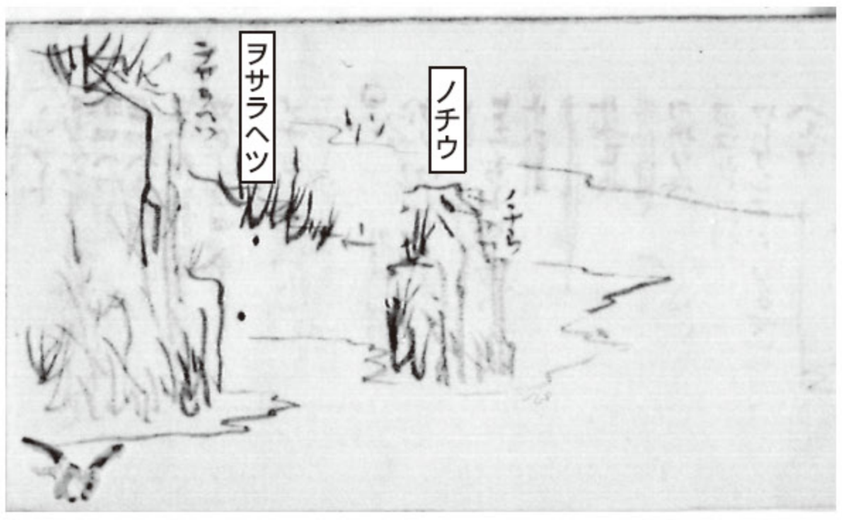
今回は、旭川を実際に踏査・調査した人物によるオサラッペ川の表記の主なものを一覧し、地名解をまとめる。

文化四年(一八〇七年)の近藤重蔵の川筋図、蝦夷図には、オサラッペ川の記録はない。伝・文化十四年(一八一七年)の間宮林蔵作成の蝦夷地図では、「オサッベ川」、支流に「トイオサラベ川」がある。間宮林蔵の資料を元に編集され、高橋景保(かげやす)がシーボルトに贈り、その後幕府に没収されたという『蝦夷図』では、「ヲサラッペ」で、「ヲサラッペ」の初出である。

安政四年(一八五七年)、大雪山連峰を踏査した箱館奉行イシカリ詰の松田市太郎の『イシカリ川水源見分書』(松浦武四郎の書写)では、「ヲサラベツ」。

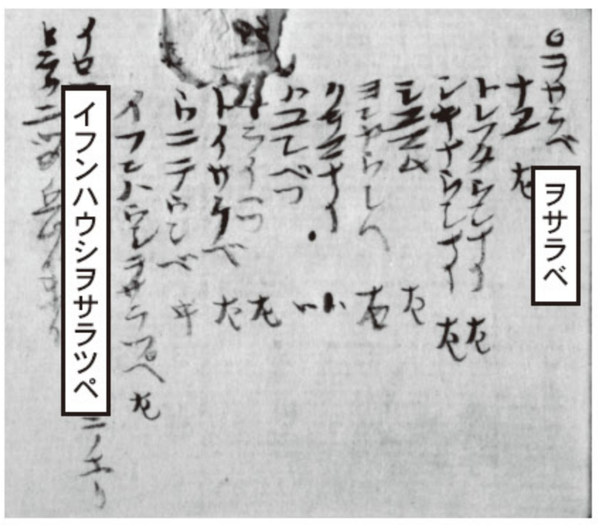
同じく安政四年に調査した松浦武四郎は、野帳(のちょう)(フィールドノート)に、**写真①**の「ノチウ」と「ヲサラヘツ」川口のスケッチを描いた上で、シイピラサからの聞き書きの「ヲサラベツ―物を分ける事を云。差開けし故云り」と記録した。

更に松浦武四郎は、文化十三年(一八一六年)生まれの上川アイヌのリーダーであった惣乙名(そうおとな)(地域の首長)のクウチンコロから聞いたオサラッペ川の支流名を**写真②**のように野帳に記録した。川名は、「ヲサラベ」で、支流名が十一個記載されていて、その最後の支流名が「イフンハウシヲサラッペ」である。

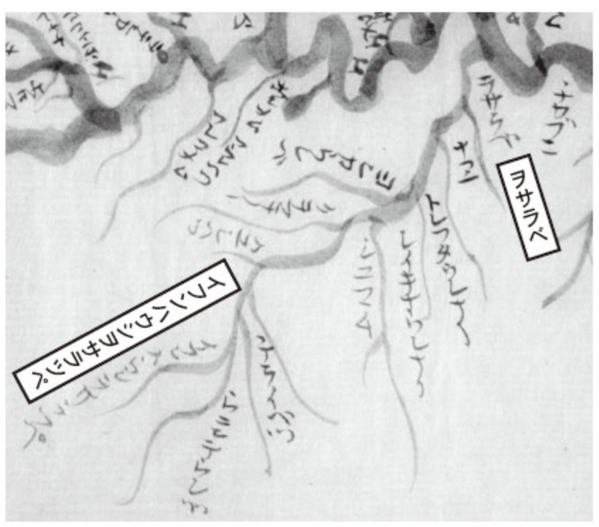


写真① オサラヘツ

松浦武四郎は、右の野帳の「ヲサラベ」の支流名を、**写真③**の『川々取調帳』にも描いた。



写真② ヲサラベと支流



写真③ 『川々取調帳』

また、報文日誌の「再篙(さいこう)石狩日誌」に、「サルブツ―本名ヲサラベと云よし。訳して物の終わりと云事のよし。」と記している。木版の『石狩日誌』は、「サラベツ」である。

以下、紙幅の関係で資料名を割愛して、調査年と調査者、そして「オサラッペ川」の表記を列挙する。

明治五年、高畑利宜(たかばたけとしよし)は「ヲシャラヘツ」。明治六年、ワッソンは「ヲサルベ川」「Osarupe R」(地図は明治八年)。明治七年、ライマンは「ヲサラッペ」「ヲサラベツ」。明治九年、松本十郎は「ヲサラベツ」。明治十五年、福士成(なり)豊(とよ)は「雄猿辺(おさるべ)」。明治十七年、高橋不二(ふじ)雄(お)は(紀行文には記載はないが、明治二十年の『改正北海道全図』では)「ヲサルヘツ川」。

明治二十年に上川原野の殖民地撰定を担当した福原鉄之(てつの)輔(すけ)の復命書では、「ヲサラッ別川」「ヲサラッペツ原野」「ヲサラッペ川」等の種々の表記がなされた。それを受けて、明治二十年、『上川原野殖民地撰定図』では、「オサラッヘ川」の表記となった。

明治二十四年に近文原野の区画測設がなされ、同年、永田方正(ほうせい)が、『北海道蝦夷(えぞ)語地名解』で、「オサラッペ」と表記、その上で、「サラハ出スノ義、此処茅(かや)ナシ」と明記した。翌明治二十五年には、鷹栖村が設置される。明治二十六年、北海道庁が発行した『石狩国上川郡鷹栖村区画図』に、「オサラッペ川」が記載され、以後、これが公式河川名となったものと推定される。

さて、以上の川名呼称履歴、そして、**写真①**の松浦武四郎の「ノチウ」と「ヲサラヘツ」川口のスケッチ等を勘案すると、地名解は、松浦武四郎がシイピラサから聞いた「オサラペッ(o-sara-pet 川口・開いている・川)」が妥当である。「川も生き物」と理解していた古い時代の考え方では、「オサラペッ(o-sara-pet 陰部を・開いている・川)」であって、永田方正は、それを、当時の伝承として、「女神玉門ヲ出シタル処」と記述したのである。

(アイヌ語地名研究会幹事)

※毎月第1週号に掲載します